10. 熊本県天草市上田家文書調査

東　　昇

1．概要

天草市上田家文書は、幕府領肥後国天草郡高浜村庄屋文書で、約 7000 点が現存する。1997 年以来調査を継続し、研究成果として 2016 年『近世の村と地域情報』（吉川弘文館）を刊行している。今年度は科学研究費助成事業基盤研究（A）「障害の歴史性に関する学際統合研究　―比較史的な日本観察―」（研究代表：高野信治）の一環として、引き続き調査を進めた。

今年度の調査は、2022 年 9 月 7 日～ 10 日の 4 日間、上田家資料館において調査補助長谷川巴南（京都府立大学博士前期課程 1 回生）・渡邊幸奈（同歴史学科 3 回生）と実施した。上田家資料館（天草市、上田陶石合資会社内）では、上田家文書中の障害・火事・養子争論・女性・宗門心得違など人認識に関する文書を選定し撮影した。

2．近世後期庄屋家妻の病・体認識

また、同科研、今年度の調査成果として「近世後期庄屋家妻の病・体認識　―天草郡高浜村上田さほの養生記録―」（『京都府立大学学術報告 (人文)』74、2022 年）をまとめた。本研究では、近世後期、村社会における庄屋家の娘（上田さほ）が、自分の病や体、それに関わる医師の診察、投薬について、どのように観察・認識していたか、その実態をあきらかにした。

結果、①さほは、父上田宜珍が当主で母も健在であり、約一ヶ月間の熊本への療養など家を離れることが可能な立場である。妻でありながら娘として比較的自由な行動と判断が可能と考える。しかし、熊本への「養生」は、庄屋家の継承のため妊娠・出産する次代妻としての役割・期待を負う行動でもあり、両側面の要素が含まれる。

②さほの場合は、妊娠につながる経候不調など婦人病の治療であり、妻としての役割を自覚し、自身の体調や病状の変化を特に詳細に観察・記録した。

③二〇代前半の女性本人が記した受診・服薬、体調・病状の記録は、医師への説明のための記録でもある。この記録という視点から、父宜珍の庄屋日記との共通性を指摘できる。さほは、和歌と同じく、父の日記執筆、村行政の運営を近くで見聞しており、その姿勢・様式に学んだ可能性が高い。医師情報や薬の入手も、父宜珍の支配関係・知人が大きな役割を果たしている。熊本城下の疱瘡に対する敏感な反応は、熊本行の半年前に宜珍が主に対策を展開した疱瘡流行に関連していると思われる。当時、天草をはじめ国内各地で疱瘡忌避意識は強かったが、これも父宜珍のもとで見聞した経験によるものといえる。さほの自己表現能力や生活した庄屋家の環境は、一般的な農民層とは相違するが、病・体などの変化は共通すると思われ、その実態は普遍化できると考える。

編集後記

フィールド集報は、刊行当初より Adobe 社の InDesign を利用して組版作業を手作りでおこなっている。InDesign の取り扱いは、歴史学科文化遺産学コースのうち、考古・建築・地理の実習メニューに含まれ、本書の一部については、そうした実習のなかで学生が組んだものとなっている。

今年度のフィールド調査においても、各地で多くの方からのご理解とご協力を賜った。ここに改めてお礼申し上げる。歴史や文化遺産にかかる調査は一人では決して成しえないということを、今後も常に意識するように努めたい。（う）

京都府立大学文学部歴史学科
フィールド調査集報　第９号

編集・発行　京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522　京都市左京区下鴨半木町 1-5
発　行　日　2023 年 3 月 30 日
印　　刷　株式会社 北斗プリント社
〒606-8540　京都市左京区下鴨高木町 38-2